

三省堂 国語教育

ことばの学び

a new way of learning Japanese



平成23年度版

『小学生の国語』『小学生の書写』

教科書特集号Ⅱ



三省堂

言葉と教育の三省堂

三省堂は、創業以来130年、一貫して「言葉と教育の会社」として出版活動に取り組み、日本の言語文化の醸成と、教育の本来の目的である人作りに寄与することを企業理念に掲げてきました。



「ことば・ころろ・いのち」にこめた願い

「ことば」で自己を見つめる、「ことば」で世界を認識する。それは、自己の確立をうながし、自身を大切にする「ころろ」を育てると同時に、他者を認識し、尊重する態度を育てることであります。言葉の力の充実は、生きる力に結びつき、一人一人の「いのち」を大切にする生き方を保証することとなります。わたしたちは、子どもたちの人間形成に資するために、「ことば・ころろ・いのち」を以上のような関係でとらえ、基本理念といたしました。

三省堂 国語教育

ことばの学び

a new way
of learning
Japanese

平成23年度版『小学生の国語』『小学生の書写』教科書特集号Ⅱ

CONTENTS

- 02 グローバル・スタンダードの言葉の力を身につけるには 北川達夫

- 04 『小学生の国語』の特徴
- 06 カリキュラム・マネジメントと授業づくり 高木展郎
- 08 図書を使って情報を扱う力を育てる教科書 堀田龍也
- 10 音声言語指導の視点から見た教科書の特徴 高橋俊三

- 14 『小学生の書写』の特徴
- 15 「しょしゃのがくしゅう, たのしいな」 小林比出代
- 16 毛筆と仲良くなるために 小西憲一
- 17 文字群の指導と運用能力の育成 谷口邦彦

- 18 三省堂『小学生のデジタル国語』
——1冊の「大きな教科書」が、いつもの授業を変える!

- 20 教室での道具として完結する本 新谷雅弘
- 21 『小学生の国語』『小学生の書写』編集委員



グローバル・スタンダードの言葉の力を身につけるには

● 日本教育大学院大学 北川達夫

私はフィンランドで国語の教科書と教材の作り方を学んだ。もともとフィンランドに住んでいたし、そこで教育を一から勉強したのだから、私としてはごく自然なことだった。だが、日本人はもちろんのこと、フィンランド人にも聞かれたものだ。

「フィンランド語と日本語は違うのだから、フィンランドで国語教育を勉強しても日本では役に立たないんじゃないの?」

確かにそれは否定できない面もある。しかし、私は外交官としての経験から、言葉の運用能力には、言語の違いを超えた「何か」があることを確信していた。英語はネイティブ並みなのに、その「何か」が欠けているために外交現場では役に立たない同僚を見るにつけ、確信を強めたものだ。それは実に根元的な力であって、決して高度なものではない。だが、意識してはぐくまないと、容易に抜け落ちてしまう力であるらしい。

PISAの読解力調査においては、同一の

問題が各国語に翻訳され、各国の子どもたちは各国語で受検するが、その回答は同一の規準で評価される。この調査で求められているのは、まさに言語の違いを超えた力といえるだろう。どの国で学ぼうと、同じ力が求められているからだ。これこそ複雑化・多様化・グローバル化する世界で生きるための「言葉の力」である。その力を、自国の国語教育でどのようにしてはぐくむかが問題なのだ。

今回の三省堂の教科書教材作成にあたっては、フィンランドのみならず各国の国語教科書を参考にして、すべてに共通する理論と方法に留意した。そのうち、特に強調したいのは次の二点である。

だれでも使える教科書教材であること

いまPISA型読解力を現場で実践するというと、熱心な先生たちが勉強と研究と研修を重ねて、ようやくできるかどうか——といった観がある。とにかく大変なのであ



きたがわ たつお
1991年～1998年、在
フィンランド日本国大
使館在勤。退官後、フ
ィンランドで「母語と
文学」科の教材作法と
教科教育法を学び、日
本とフィンランドのほ
か、各国の教科書や教
材制作に携わっている。



1年「いぬの きもち」



2年「きぜつライオン」

る。もちろん勉強や研究や研修を重ねるのはよいことだ。だが、現場の過大な努力と労力が前提となっているようでは、全国津々浦々にまで普及と定着を図るのは難しい。そこで、だれでも簡単に実践できる教科書教材づくりを目指すことにした。

これについては、他の国でも事情は同じである。なぜなら、PISA型読解力はどの国にとっても新しい概念だからだ。たとえばフィンランドでは、多くの教科書出版社が「新任の先生でもベテラン並みの授業ができる」ことを国語教科書の最大のセールス・ポイントにしている。フィンランドの先生が特別に資質・能力に優れているわけではない。教科書の使いやすさが重要なのである。

指示と評価の明確化

PISA型読解力においては、児童にどのようなにして意見を構築させるか、そして、構築した意見をどのようにして評価するかが常に問題になる。この点に関しては、次の三段階が、言語の違いを超えた、最低限の規準として共有されていると思う。

- ①考えを表明する。
- ②テキストのどこを読んで／見て、そのように考えたのか、テキストから根拠を挙げる。

- ③自分の考えと、テキスト中の根拠との関連性を説明する。

これまで、児童に課題に取り組ませる場合、複数の作業を一度にまとめて指示する傾向にあり、全体として作業指示が曖昧になりがち部分があった。そこで、意見を表明させる場合は特に、前述の三段階を強く意識して、作業指示を明確にするようにした。「どう思った？」、「どこを読んで／見て、そう思った？」、「なぜ、その部分からそう言えるの？」というのが基本的な流れである。

これは作業指示の明確化であると同時に、評価規準の明確化でもある。すなわち、考えが表明できれば第一段階がクリア。テキストから根拠が挙げられれば第二段階がクリア。考えと根拠を関連づけられれば第三段階がクリアということだ。もちろん評価規準は段階に応じた設定が必要で、最初からすべてを求めるのではない。児童個々に応じた設定が必要な場合もあろう。だが、評価規準が明確であれば、それも困難ではないはずだ。まずは考えを表明し、テキストから根拠を挙げられるようになることが目標である。

意見構築の段階が明示されていれば、さまざまな活動が可能になる。たとえば、一人の考えを基にして、全員で相談しながら意見を

3年「南の島へようこそ」



6年「宇宙時代を生きる」

構築する。あるいは、他者の表明した考えについて、自分がテキストから根拠を探し、考えと関連づける——等々。こういった協同作業においては、自分と他者の価値観の違いや、個々の知識の相互矛盾などが明らかになり、その調整を余儀なくされる。その経験を積み重ねることによって、ものごとを多面的に見る力が育まれ、より高度なクリティカル・リーディングへと進むことが可能になるのである。

新しい学習指導要領と新しい「教科書観」は、
新しい形の教科書を求めています。

『小学生の国語』の特徴

1 質・量ともに格段の充実

平成20年12月 教科用図書検定調査審議会報告「教科書の改善について」より(抜粋)

○ 教育基本法等に示される教育の理念・目標や学習指導要領の内容等は、教科書に記述されることによって、初めて目に見える形で実現されるものである。新しい教育課程の実現のため、教育基本法の改正や新しい学習指導要領を的確に反映し、新しい教科書観に立った、内容豊かで読み応えのある、質・量ともに格段に充実した教科書に向けて改善方策の検討が求められる。

2 「教科書の内容はすべて学習しなければならない」という考え方からの転換

平成20年12月 教科用図書検定調査審議会報告「教科書の改善について」より(抜粋)

○ 多くの教員や保護者の間に定着している、「児童生徒は、教科書に記述されている内容をすべて学習しなければならない」とする、従来型の教科書観については、「個々の児童生徒の理解の程度に応じて指導を充実する」、「児童生徒が興味関心を持って読み進められる」、「児童生徒が家庭でも主体的に自学自習ができる」といった観点から、教科書に対する考え方を転換していくことも求められる。

3 児童自身が学習の見通しを立てたり、学習を振り返ったりできる

平成20年1月「小学校学習指導要領 総則」

「指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」より(抜粋)

○ 各教科等の指導に当たっては、体験的な学習や基礎的・基本的な知識及び技能を活用した問題解決的な学習を重視するとともに、児童の興味・関心を生かし、自主的、自発的な学習が促されるよう工夫すること。
○ 各教科等の指導に当たっては、児童が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を計画的に取り入れるよう工夫すること。

そうした要請に応えるためには

全員(一斉)授業で
1年間を通して使う

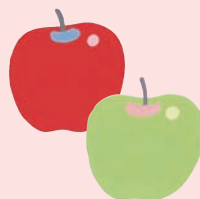


『小学生の国語』

一人一人の学習に応じ、
さまざまな場面で使う



『小学生の国語 学びを広げる』



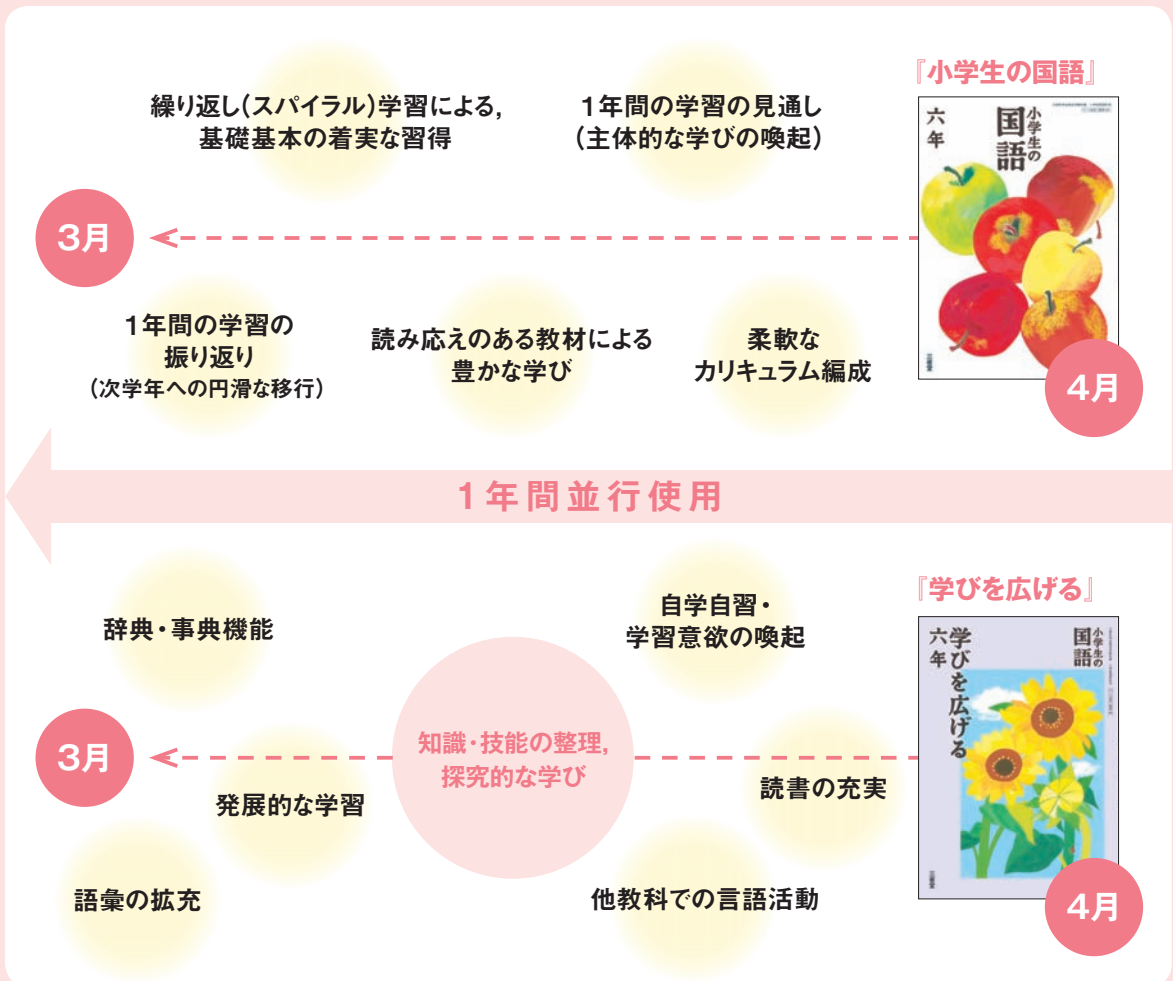
新たな形の国語教科書で、以下のような学びを実現します。

●1年(上下巻構成。それぞれの巻末に「まなびをひろげる」を収録。)

1年生は、国語の学びを無理なく自然にスタートできるよう、1年間で半年で区切る上下巻構成としました。



●2年～6年(『小学生の国語』と『学びを広げる』の2冊を、1年間並行使用。)



カリキュラム・マネジメントと授業づくり

●横浜国立大学 高木展郎

一 カリキュラム・マネジメントの必要性

カリキュラム・マネジメントとは、訳すと「教育課程経営」になる。カリキュラムが「教育課程」であり、マネジメントが「経営」である。この二つの語が合わさることにより、カリキュラムを学習者の実態に合わせて意図的、計画的に構成し、運営・実践、評価することを、カリキュラム・マネジメントということになる。

教育課程を経営することは、各学校の児童の実態にあった年間計画と内容をいかに実行するか、という計画性と実行性が問われることになる。

このことから、教育課程を年間を通してだけでなく、小学校では六年間、中学校では三年間という学習者の成長のスパンを見通したカリキュラムの作成が求められる。

学習指導要領は、この学習者の成長を見通した教育課程の規準を示している。それぞれの学年で育成すべき学力を示しており、その

学力の育成は意図的、計画的に行われなくてはならない。ここに、カリキュラム・マネジメントを行わなくてはならない根拠がある。

特に、国語科の学習指導要領の解説には、付録に「各学年の目標及び内容の系統表（小・中学校）」が示されており、ここには指導事項の具体的な内容の系統が示されている。

これからの時代の学校教育は、これまで以上に、教育内容の規準として学習指導要領に示されている学力を、意図的、計画的に育成していくことが求められている。

これまでの授業では、特に、長編の物語や書くことの教科書教材においては、じっくりと取り組むと年間の授業時数が足りなくなってしまうことも多かった。

そこで、年間指導計画として単元の時間的な軽重をつけ、教育内容の重点化を図ることが必要になる。また、学習者がじっくり考える時間をとることや、各領域で重点化された内容にじっくりと時間をかけることを、カリキュラム・マネジメントを通して実行してい



たかぎ のぶお 横浜国立大学教授。中央教育審議会教育課程部会国語専門部会主査代理・文化庁文化審議会委員・中央教育審議会評価ワーキング委員。



1年間通した1冊の教科書によって、1年間通して、見通しと振り返りを意識した学習が可能となった。

くことが必要となる。

二 これまでの小学校国語教科書の境界

カリキュラム・マネジメントを学校教育に位置づけて教育活動を行うには、これまで学校教育の主たる教材として用いてきた教科書のコペルニクスの転換を図ることが最重要課題である。

小学校の国語の教科書は、これまで年間で上巻と下巻の二冊に分かれてきた。それは、小学生が重い教科書を毎日学校に持つてくることへの負担を軽減するため、というのが主な理由であると考えられる。しかし、それによって本来学校教育で育成すべき学力の保障が行いにくくなっていることも事実である。

それは、教科書が上巻下巻の二巻に分かれ、しかも、前期には後期の教科書が配布されていないために年間を見通して学習計画を立案することができず、さらに、学習者としての児童に、年間の学習の見通しを提示できないことは、螺旋的に向上すべき学力を分断することになる。そこでは、学習の系統性と文脈性が分断され、単に、一つ一つの教材をこなすだけの授業となる。

新しい学習指導要領の総則には、以下のよ
うな記述がある。

第4 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項

(4) 各教科等の指導に当たっては、児童が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を計画的に取り入れるよう工夫すること。

これまで指導計画の作成は、教師のためのみにあつたが、これからの時代の学校では、児童が学習の見通しを立てることも求められている。そのためには、一つの学習を対象とするのではなく、各学年ごとに、どのような学習が行われ、どのような学力の育成が図られるかということ、学習者である児童にも見通しとしてもたせることが重要である。さらに、前期で行ったことを後期に振り返り、学習のメタ認知を行うことも重要である。

しかし、これまでの小学校の国語教科書では、このことを実行することが不可能であった。それは、教科書が一つの学年を上巻下巻に分け、学習時期を分断してきたことによる。下巻の学習を行っているときに、既に児童が上巻を無くしているという場合もある。教科書で、学習者に一年間の学習の見通しをもたせることや、メタ認知として学習したことを



『学びを広げる』の活用によって、より弾力的で多様なカリキュラムを生み出すことができる。

振り返ることは、今回の学習指導要領の最重要課題であり、そのことを具体化できる教科書が求められている。

したがって、年間の学習を振り返ったり、文脈化を図ったりすることのできる教科書が、これからの時代が求めている学力を育成することのできる新しい教科書なのである。

図書を使って

情報を扱う力を育てる教科書

●玉川大学 堀田龍也

私たちは情報社会に暮らしている。テレビのスイッチを入れるといつでも情報が飛び込んでくる。インターネットで調べられることも日常的だ。ケータイでメールを送り合うことは、お互いの人間関係を保つことに役立つている。

「次の世代」の子どもたちは、私たち大人の現在よりも、より多くの情報が、より多方面から降り注ぐ情報社会を生き抜いていくことになる。降り注ぐ情報の中には、整理されていないものもあれば、真偽が怪しいものもあるだろう。これらの情報とつきあっていくことになる子どもたちに、小学生のうちに教えておかなければならないことはなんだろうか。

情報とは、実は「言葉」である。私たちは、言葉で読み取り、言葉で考え、言葉で伝えていく。本に書かれている情報も、ホームページに書かれている情報も、すべて言葉だ。写真や動画は、それ自体は言葉ではないが、そこに描かれている事象を私たちが理解するときには、頭の中で言葉を使っている。日本語なら理解でき

るものが、よその国の言葉では理解できない。

したがって、多くの情報を的確に処理しながら生き抜いていかなければならない次の世代の子どもたちこそ、言葉に親しむことや、言葉を使って考える力がさらに大切になる。

「言葉の力」が今日さらに重視されている理由はここにある。

子どもたちが言葉に出会い、言葉に親しみ、言葉を使って情報を集め、発信すること。この基礎体験は、実は図書館教育にある。

情報の入手や選択を教える際には、まずは情報入手の王道である図書をどうやって選んでいくかから教えることよい。まずはある程度の信頼度が保たれている図書の情報をつかりと読み取ることから始める必要があるからだ。メディアの特性を把握することについては、図書と比較して、ビデオ、インターネットと比較の範囲を広げていけばよい。

調べ方を教える際には、教師が図書を指定することで情報を限定して与えたり、図書を選ぶ

という活動を通して集め方を教えたり、図書の中身を吟味させたりすることで情報を判断する力をつけていくとよい。辞書や図鑑にたくさん触れ、その量感を感じている子どもだからこそ、インターネット上の情報量の多さや、検索の仕組みが理解できるようになる。

人に聞く、図書で調べる、インターネットで検索するなど、さまざまな情報収集の方法があるが、一・二年生にインターネットはまだ早い。この時期には、人に聞くことをしっかりと教える方が先決だ。同時に図書に慣れ親しませる。その後、三・四年生でできるだけ多くの機会に図書館を使って調べる体験をさせ、図書に親しませ、同時にインターネット体験をさせておく。その上で、五・六年生になったらインターネットを道具として使わせるといふくらいがちょうどいい。

図書を使ってたくさん調べた経験がある子どもたちなら、調べることの大変さがわかっているから、インターネットの便利さを実感できる。「インターネットと本はどう違います



ほりた たつや 玉川大学大学院教育学研究科教授。文部科学省参与を併任。専門は情報教育の授業実践やカリキュラム開発。博士(工学)。

か？」と教師が問いかけてみるとよいだろう。図書を使って調べれば、まとまった情報を手に入れることができる。一方、インターネットを使えば、さまざまな人が発信する情報に目を通したり、最新の情報をチェックしたりすることができる。そういったメディアの特性を理解させることは、図書で調べる体験が多いほど容易になる。その上で、自分が調べている課題に役立つ情報を得るにはどのメディアが適しているのかをきちんと考えさせたり、話し合わせたりすることが大切だ。ホームページに書かれている内容を読み取り、判断する能力も必要になる。調べたらプ

ントアウトして終わりとか、カット&ペーストして終わりになってしまふようなことがあるが、それはインターネットが悪いのではなく指導する教師の問題だ。教師は、ホームページを見つけて終わりにならないよう、プリントアウトしたものに大事なところに線をひかせて、要点をまとめさせるといふように、読み取り方を教える必要がある。図書で調べる時と同じことだ。これは著作権の学習にもつながる。情報社会をしっかりと生き抜く子どもたちを育てるためには、パソコンの操作を覚えさせればよいというわけではない。それよりむしろ、「言葉の力」を充実させることが重要なのだ。

筆者は、三省堂の『小学生の国語』の編集において、図書館・情報系列のカリキュラムを担当した。各学年に四本ずつ登場している。「図書館へ行こう」のように図書館活用を促すページや、情報の分類の仕方などについて体験させるページ、新聞をはじめとする諸メディアの特性を意識したページもある。各学年に系統的に配置することによって、子どもたちに情報社会に対応する力——それは言葉の力そのものであるが——が身につくようになっていく。見開き二ページの中にも情報満載の教材として仕上がっている。ぜひご活用いただければ幸いである。



2年「本を大切にしよう」



3年「図かんでしらべよう」



4年「新聞のくふうを知ろう」



5年「インターネットを使って調べよう」

音声言語指導の視点から見た教科書の特徴

●前群馬大学 高橋俊二

一 声を届け、受けとめる。

『しょうがくせいのかくご(一年下)一〇六ページに「こえの 大きさ」という、音量を四段階に分けた発声法の解説がある。教材のねらいは、話す場所や相手によって、どのくらいの声の大きさがよいかを考え、話すようにしようというものである。

話す声の大きさに、学習の中心を置いている。一年生の教材として、必須で重要な教材である。一年生には、難しいことを言ってもわからない。まず音量に気をつけさせようとするのは時機を得た学習である。



1年「こえの 大きさ」

それでは、教師用指導書の何ページかに、話すときの声の大きさを考えようということ、が、中心的な事項として載せられていたとしたら、どうか。それは、まことに不足。声の大きさは、話すときの初歩の初歩。教師の話は、その上を行かなければいけない。声は聞こえればよいのではない。相手に届けるのだ。届ける声は、「話す場所や相手」によって、低い声、落ち着いた声など、質にも関係する。また、声の質は、伝えようとする物・事とも関係する。一年上六〇ページにある教材「いろいろな こえ」は、そのことを言っている。驚いたときの「あ」、何かを見つけたときの「あ」、あくびの「あ」は、皆違うのだ（もちろん、音量も違う）。

音量と声質は、温かい眼差しを向けたり、手を振り上げたりするなどの身体動作とも関係する。音声言語の教育は、このような身体言語までを含めて考える必要がある。

聞くという視点から見ても、また、話し合



1年「いろいろな こえ」



たかはし しゅんぞう
前群馬大学教授。小中高大学の教職を経験。NHKテレビ「朗読入門」「話し方教室」などに出演。NPO日本朗読文化協会顧問。「なんとユーモア」(文教書院)、「声を届ける 音読・朗読・群読の授業」(三省堂)など著書多数。

う(聞き合う)という視点から見ても、音量と声質の両面から、相手の声を受けとめ、互いに受けとめ合うことの重大さと、楽しさなどを、理解させ、習得させ、活用させていくことを大切にしていきたい。

二 声を届け、受けとめる具体の姿

『小学生の国語三年』五八ページに、「声を合わせて楽しく読もう」という教材がある。はじめは、谷川俊太郎氏の「ののはな」という四行の詩。この詩の朗読・群読の授業を想定してみよう。

まずは、何度も読ませるだろう。次に読解が始まる。教師の「何が見えますか」という発問があるだろう。「なすな」「なのはな」という答え。板書する。「なもないのばな」という答えはどうするか。「名も無いのですね」とあしらって、板書しないかもしれない。

「季節は」の問いに「春」の答え。板書する。この詩の組み立て（構成）についての発問に対しての答えは、少々時間がかかるかもしれない。また、全員が気づくまではいかないかもしれない。だれかが、「問いと答えになっている」と気づいて、発言。教師は解説を加えて、「問答」と板書。

柔らかい音韻だという特徴については、どうだろう。気づかせてもらいたいところだが、全教室で学習されるかどうかは、わからない。日常から音韻について関心をもたせている教室だったら、柔らかさの要因である、ナ・ハ行が多いとか、しかもア・オ段が多いとかの

分析がなされるかもしれない。「やわらかい音」と板書。

さて、このような内容的・文体的な特徴の理解が終わると、「それでは、詩の特徴を生かして、朗読の練習に入ろう」と、実際に声を出す活動に移ってしまうことが多いのではなからうか。その前に、まだすることがある。ここまでは従来のいわゆる「読解」活動である。子どもたちは記号としての文章を分析して答えているけれど、実感していない。「なすな」「なのはな」を眼前にイメージしていないのである。このまま進んだのでは、機械的な発声の、個性の無い朗読になる。

齋と菜の花の生え具合を、絵に描くように想像させよう。一緒に生えているのか。別の区画に生えているのか。何本か。広がり。傾斜は。山裾を登っていくのか。野を下っていくのか。それらの状況によって、声の広がりや違ってくる。

また、名も無い野花をも、具体的に想像させよう。葦か、蒲公英か。図鑑をちよつと見せてもよいではないか。子どもたちの心と声は、俄然豊かになる。

問答という組み立ての音声化でも、同じ。「問いの文型は語尾を上げて」、「答えの文型は語尾を下げて」では、一律的・没個性的な音

声化になる。どんな広がりの花野を見て、どんな気持ちで、だれが尋ねているのか。それに対して、だれが、どんな気持ちで答えているのか、大いに想像させよう。それによって、声の出し方が違ってくるのだ。

「柔らかい音」についても、知識としての整理も大切ではあるけれど、具体的に、例えば「がだどどどどがど」との違いを実感させることも大切である。



3年「声を合わせて楽しく読もう」

一教材についていささか詳細に述べてきたが、ここでは次のことが言いたいのである。

前半は、いわば、正解を求める読解活動。全員の答えを一つに絞らなければならぬ収束的思考の授業である。反対に、後半は答えを一つに絞ってはいけない拡散的思考の活動である。

日本の子どもたちについて「PISA型読解」が不得手であるという評判は、この後半の思考が指摘されているのである。

後半の拡散的思考は、自分自身の判断・評価が求められる。菊だの桜だのと、条件に合わないでたらのめの想像はいけませんが、春の野花の付け加えの想像、また、野の広がりや春の陽気などの想像等々、一人一人違っていてよいのである。違ったほうがおもしろいのである。

そして、皆が違う想像や読みを発表し合い、評価を話し合うところに、活発な学習が行われる。

さて、ここでは次に、群読の学習活動が控えている。一・二行目の問いと、三・四行目の答えとを、二人（二パート）で分担して読むとすれば、当然、相談・話し合いが必要になってくる。どんな聞き方をするか、どんな答え方をするか、打ち合わせが行われる。

まして、二人に、本人ではない役柄を与えたとしたら、どうなるか。例えば、幼稚園児

が聞いてお爺さんが答えるとか、鼠さんが聞いて象さんが答えるとか。子どもたちは、奇抜なアイデアを求めて、活発な議論が巻き起こるだろう。読み声もおもしろくなってくる。この段階は、「PISA型読解」が言うところの、自分の表現活動の段階である。

「ののはな」に続いて教科書には、まど・みちお氏の「かぞえたくなる」がある。貨物列車の連続と雀の並列との対比がおもしろく描かれている。この対比を、効果的に読み表すにはどうしたらよいか。この段階は、「PISA型読解」を超えた応用編の表現活動である。

「PISA型読解」というと、ややもすると説明的文章や文字言語の領域で論じられることが多い。しかし、朗読・群読のように、文学的文章で音声言語の領域においても通じるところがあるのだということを考えておきたい。

三 「PISA型」と論理的活動との関係

それでは、論理的・説明的活動の場合とは、どうなっているか。論理的な受容(聞くこと)と表出(話すこと)が、すべて「PISA型読解」とのみ対応しているわけではないが、その関係を中心にして整理してみたい。

前節と同じように、三段階に分けて考えてみよう。教材の系列は次のようになってい

- ① 事柄を正確にとらえ、整理して受容する段階。そして、的確に伝える段階。―説明・報告の系列（主として九月）
- ② 事柄を自分の視点からとらえ、判断し、意味付けして受容する段階。そして、自分の意見をまとめて伝える段階。―プラザの系列（二月）
- ③ 自分の意見を相手に応じて述べ合い、互いの意見を調整する段階。―話し合いの系列（主として一・二月）

4年「レポーターになろう」
(説明・報告系列)



4年「大きくなったら
なりたいもの」(プラザ系列)



4年「安全について考えよう」
(話し合い系列)



四 「伝統的な言語文化」と音声言語教育

この教科書では、「伝統的な言語文化」の受容は、声に出して理解し、声に出して楽しむことという主張を前面に押し出している。その視点から、教材を選定し配列している。それらは、次の三系列に整理することができる。

①『小学生の国語』「声に出して読もう」系列。ここは特に「言語文化」関係であることをうたっている。

三年…俳句 江戸・明治の有名な八句

四年…短歌 万葉から昭和の有名な七首

五年…外国の詩（文語調の詩）

カール・ブッセ「山のあなた」他三編

六年…漢文「論語」有名な五章句

②『小学生の国語 学びを広げる』「読書の森」で「系列。声に出して読むことを勧めている。

（二年は民話の再話）

三年…江戸笑話・いろは歌・竹取物語

四年…浦島太郎・小倉百人一首

五年…落語・漢詩・平家物語

六年…枕草子・徒然草・おくのほそ道（冒頭部や有名な段。短く易しい部分である。）

③『小学生の国語』「言葉と体」系列。この教科書の一大特色、自分の体と声を創っていくとする系列である。

一・二年…自分の声を自覚する。

三年…群読。他者の声と合わせる。

四年…落語。語りかける声を工夫する。

五年…狂言。昔の人の心を理解しつつ読む。

六年…対話。自分たちに合った言葉を工夫。

自分の声から出発して、自分の声に戻るという一連の学習がセットされている。まさに自分の声と言葉を発見し、磨いていくこととする学習である。子どもたち一人一人の声と言葉をはぐくんできていくのではないか。

五 言語活動の習得と活用

音声言語教育の視点から見ると、学習指導要領で言語活動例の扱いが重視され、その活動例が増えていることはよるこばしい。個々の言語活動は、子どもたちに理解させただけでは不十分である。習得させ活用させて初めて身についたことになる。

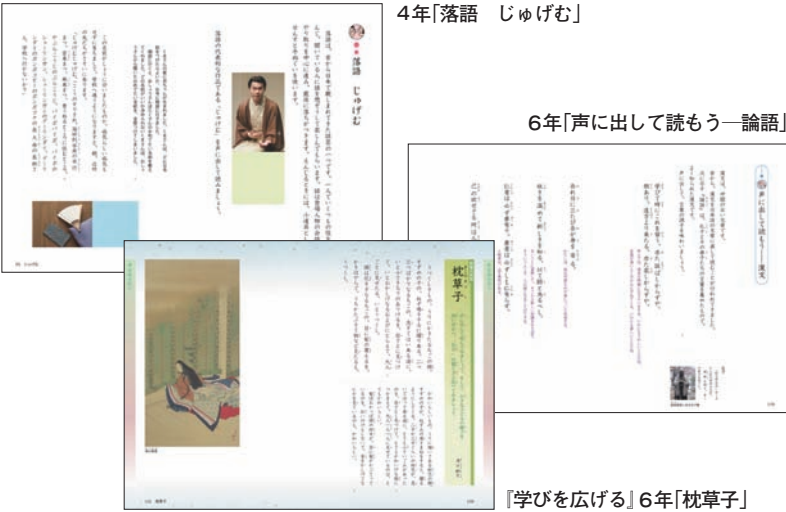
一つ一つの活動例について詳述する紙面はないが、しかるべき教材の学習において、習得と活用が明示してあることは述べておきたい。

言語活動例に付随して、最近では、読解力でもない、聴解力でもない、絵や写真や地図を見て自説を述べるといふ、いわば「見解力」とも言うべき能力が求められている。この見解力についても、この教科書は応じようとしている。

4年「落語 じゆげむ」

6年「声に出して読もう—論語」

『学びを広げる』6年「枕草子」



『小学生の書写』の特徴

書写技能の「運用能力」を育て、書字を通して「生きる力」をはぐくむ

「字を書くまで」をていねいに

字の形を意識する前に、手指の基礎的な動きを体得できるよう、導入部の内容に配慮しています。



気づき, 考え, 判断しながら書く学びのスタイル

「考える」→「書く」→「振り返る」という学習過程を通して書写技能を確実に身につけ、思考力・判断力を育成します。



日常生活における書写運用能力の育成

他教科の学習や日常生活の中でのさまざまな書字場面を取り上げ、身につけた書写技能を運用することで、「生きる力」としての書写能力を確かなものとしていきます。



「しよしやのがくしゅう、たのしいな」

●長野県立松本深志高等学校 小林比出代

小学校に入学した子どもたちは、文字に関する学習を大変楽しみにしている。一方、姿勢や筆記具の持ち方、字形や筆順等、幼児期に特有な書きぶりや書き方が定着してしまったり、現代の子どもたちは就学前に文字を書く機会が多い。これから新しく始まる学校生活・学習活動の第一歩として、改めて「文字を書くことの学習」のあり方を見つめ直し、子どもたちが「書写の学習っておもしろいね」と笑顔を見せる学習展開を目指したい。『小学生の書写』には、そんな思いが詰まっている。

レディネスの重視 1. 指でなぞる

『しよしがくせいしよしや 一年』では、実際に鉛筆を執って文字を書く学習の前の、レディネスの段階を大切に考えた。その一つが、脳の働きを如実に現す手指、中でも最も巧緻性が高いとされる人差し指を使って、文字の点画要素や学習対象の文字をなぞる活動である。「文字を書くための指」とも称される人差し指を使い、学習のポイントとなる点画

要素をなぞることは、後に同じ要素を筆記具で書く前段階の活動として有用な学習になる。

レディネスの重視 2. 多様な線遊び

文字を書くことへのレディネスを深めるとの観点から、本書では、線遊びを積極的に取り入れている。望ましい姿勢や鉛筆の持ち方について学習を展開した後、平仮名を構成するさまざまな種類の線遊びを設けている。続く平仮名・片仮名・漢字の各学習ページすべてにおいても、その冒頭部で、学習の要点となる用筆を基盤にした線遊びを提示している。どのような用筆が求められているか子どもたちの理解を促せるように、手（筆記具）の動きが連想しやすいイラストも補助的に添えてある。

学習過程の明示

一年生の各学習単元では、学習の流れを自然につかみながら基本的な点画要素に習熟できよう、次の四つの学習段階を設けている。



1年「ひらがなの かきかた①「とめ」」



こばやし ひでよ 長野県立松本深志高等学校教諭。文字を書くことの教育について多角的な研究を試みる。青山杉雨記念賞第4回奨励賞、平成21年度全国大学書写書道教育学会奨励賞受賞。

- ① 学習対象となる用筆に基づく線遊びを行う。
- ② 要点となる用筆を含んだ文字（拡大して示されている）を指でなぞる。
- ③ ①②でのポイントを確認しながら、単体の文字を鉛筆で書く。
- ④ ③での文字を含む単語（関心を抱きやすいよう工夫し類型化してある）を鉛筆で書く。

毛筆と仲良くなるために

●香川大学 小西憲一

大部分の小学三年生にとって、初めて触れる毛筆という未知の筆記用具、これにいかにもスムーズに抵抗感なくなじませていくか、小学校書写における重要な節目であることは言うまでもない。このときの印象が、書写に対する好悪、ひいては自分の文字に対する好悪にまで影響する可能性がある。

毛筆導入にあたっては、一度に多くの情報を伝えたくならないところである。その結果児童の混乱を呼び起こすことがあるのではないだろうか。三省堂の新しい書写教科書の毛筆導入部分では、最も大事なポイントを標語のように大きく示してある。

「ほ先の向きは十時半」

毛筆においては、穂先がどこを通るかによって、点画が形作られていく。穂先に対する感覚を養うのが重要である。ほとんどすべての点画が、「十時半」の角度で入筆されていることを意識させたい。指導者の手を使った空書によって、「ほ先の向きはこの方向」などと

アレンジしてもよいだろう。

以下、基本点画の登場ごとに、朱墨で穂先の通る位置を示し、ポイントを短い言葉で大きく掲げている。常にここに立ち返ることで、基本を確認したい。

「力をぬいたり、くわえたり」

毛筆には穂の弾力を利用して強弱、つまりは線の太細を表現できるという特色がある。それが最も顕著に現れるのが、「はらい」と「はね」である。児童に見られる運筆の問題点に、勢いにまかせて荒く動かすために終筆がまとまらないということがあげられる。「はらい」と「はね」は、ゆっくりと力を加えたりぬいたりして、最後に穂先を一点に集めるという感覚を伝えたい。

身の回りの筆文字

実際筆を使って文字を書くことで、身の回りの筆文字に関心が及ぶようになる。看板や広告の筆文字を探し、歴史上の人物の書や寄



こにし けんいち 香川大学教育学部教授。教員養成課程にあって、書写書道の楽しさを伝えられる先生が、たくさん育ってくださることを願っています。

席文字などにふれる、教室の掲示物を筆で書くなど、方法はいくらかでもあるだろう。児童が筆という筆記用具に興味をもち、書写の時間が待ち遠しいと思うような、導入のあり方をさまざまに工夫していきたい。



3年「点画の書き方③『はらい』」



3年「筆で書くときのやくそく」

文字群の指導と運用能力の育成

●安田女子大学 谷口邦彦

高学年における書写学習のポイントは、文字群（文字の集まり）の指導である。用紙全体や書く目的との関係から書き方を判断するといった実践的な力の育成が求められる。文字群の指導では、「書くこと」の学習、例えば、「記録する文章、報告する文章、説明する文章、手紙、学級新聞」などと関連づけて学習することも可能になっていく。

『小学生の書写』では、「全体を読みやすく書こう」「用紙に応じて書こう」「速さを考えながら書こう」「目的にふさわしい筆記用具と書き方」それぞれで基礎技能を習得し、さらに「学習のまとめ」で実践的な力を具体的に活用できる場面を多く設定している。

目を使う

五年生の文字群の指導では、全体を読みやすく書くための、「けい線と文字の大きさ」「行の中心と行間」について、縦書き横書きそれぞれについて習熟するとともに、全体を見る「目」の視点を加えている。さらに、具体的に

手紙の封筒や便箋、原稿用紙、学級日記等の用紙を示し、書式に則って学習を進められるように構成されている。

速さを考える

六年生の文字群の指導は、従来の字配りの学習にとどまらず、運動面において特に「速さ」を考えながら「書くこと」の学習に重点を置いている。点画ごとの穂先の動きに加え、点画から点画へ、さらに文字から文字へと移動していく過程に重点をおくと、「穂先の動き」と「点画のつながり」は一体化した指導になっていく。高学年で、硬筆に比較的近い小筆での活動を多用しているのも『小学生の書写』の特色の一つになっている。「場面にふさわしい書く速さ」「筆順と点画のつながり」「つながりと書く速さ」「書く速さと読みやすさ」のように着実に進められるよう配慮している。

生活に生かす

「目的にふさわしい筆記用具と書き方」で



たにぐち くにひこ
安田女子大学文学部准教授。書写の学習は系統的に基本を積み上げていくことによって、誰でも身につけることができると思います。

は、場面や目的をもとに、用紙（便箋・白紙・模造紙など）と筆記具（鉛筆、フェルトペン、毛筆、ボールペン、筆ペンなど）の組み合わせを選択する実践的な学習になる。筆記具は、形、書く部分の材質や形状、色などに違いがある。ここでも身近な学校生活を想定した課題設定となっており、書写の時間に身につけた力はすぐに生かされていくはずだ。

6年「ポスターを書こう」

落ち葉清そうのお知らせ

日にち 11月18日
時間 午前9時～午後3時
場所 西野森公園、小雨決行

公園の落ち葉を集めてお家の隅に集めます。
注意 よごれてもいい服装で参加してください。

三宮小学校のクラブ

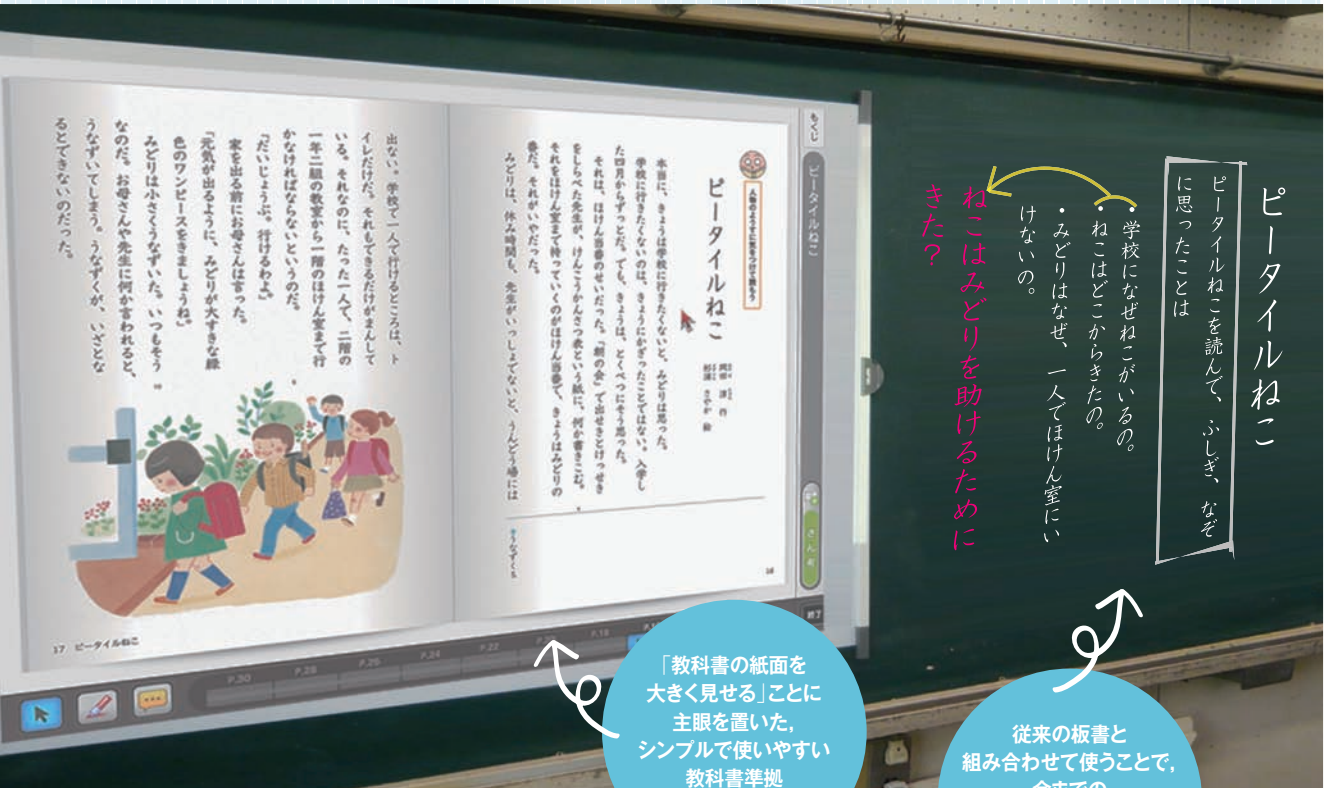
緑を大切に

教科書準拠指導用デジタル教材

1~6年

三省堂『小学生のデジタル国語』

1冊の「大きな教科書」が、いつもの授業を変える!



ピータイルねこ
ピータイルねこを読んで、ふしぎ、なぜに思ったことは

・学校になぜねこがいるの。
・ねこはどこからきたの。
・みどりはなぜ、一人でほけん室にいけないの。
ねこはみどりを助けるためにきた?

「教科書の紙面を大きく見せる」ことに主眼を置いた、シンプルで使いやすい教科書準拠デジタル教材です。

従来の板書と組み合わせて使うことで、今までの授業スタイルを変えず、より理解度を高めることができます。

『小学生のデジタル国語』編集委員



横浜国立大学 教育人間科学部
附属教育デザインセンター
准教授
野中 陽一

教科書準拠デジタル教材は、準備の手間がなく、教科書と同じレイアウトで拡大提示し、画面に直接書き込むことで、一斉指導の効率化を図ることができます。わかる授業を実現すると同時に、個別指導や思考を深める活動、表現活動の時間を確保できるのです。各教室に大型ディスプレイや電子黒板等のICT 機器が整備された今、国語の授業に欠かせないツールになるでしょう。



玉川大学大学院 教育学研究科 教職専攻
教授
堀田 龍也

基礎基本の徹底が求められる時代。教科学習において学習内容をしっかりと習得させ、それを活用することまで期待している新学習指導要領。わかりやすさを保証しつつ、そこからさらに深めて行くような授業を限られた時間で確実に実現するためにも、教科書準拠デジタル教材の活用は不可欠です。

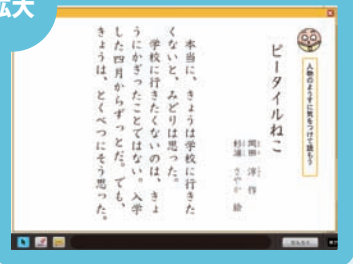
■ 使用用途・方法のご提案

- 紙の掛図や朗読CDのかわりに。
- スクリーンとプロジェクターを組み合わせたり、電子黒板や大型ディスプレイを使用して普通教室で。

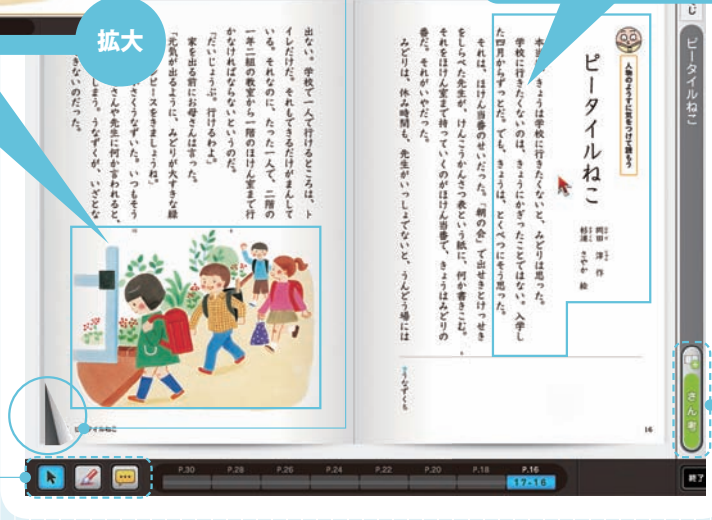
拡大



教科書をめくるように、ページをめくることができます。



拡大



マウス
教科書上で青い枠をクリックして拡大をしたり、ページをめくったりするときに使います。



ペン
教科書に線を引くことができます。



朗読
本文の朗読を聞くことができます。



大きな教科書

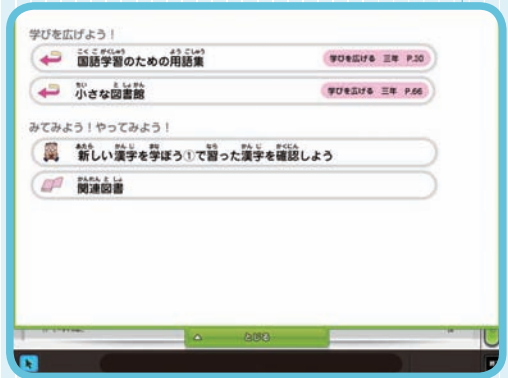
教科書をそのまま再現!
ワンクリックで簡単に紙面を拡大!
『小学生の国語』『小学生の国語 学びを広げる』
全教材に対応!



筆順アニメーション



言語の導入ゲーム



さらに広げる教材

「参考箱」には、関連する『学びを広げる』の教材をはじめ、学習をさらに広げる教材が入っています。



映像資料



漢字などのフラッシュ型教材

■ 『小学生のデジタル国語 シンプル版』 **学習指導書同梱**

※「小学生のデジタル国語 シンプル版」は、教科書画面と拡大画面のみの機能となり、ペン、朗読、参考箱は付属しておりません。

■ 『小学生のデジタル国語』 **学校フリーライセンス 各学年 29,400 円(税込)**

教室での道具として 完結する本

●『小学生の国語』『小学生の書写』アートディレクター 新谷雅弘



わたしは店頭で売れゆきを競い合う本を長い間デザインしてきた。教科書のデザインは初めてでした。でも本のカタチをしたものなら、これまでの仕事の経験にひとつ加えるだけのことだろうと漠然と考えて、制作ミーティングに出席し始めたのです。

しかし、いつもならわたしの中で立ち上がってくるはずの本の姿が今回はなかなか見えてきません。これはどうしたのだろうとあせりにも似た気分になっていました。そんなある日のミーティングで、各地での研究会での報告を聞いていて、はっと気づいたことがあります。それは「教科書は道具でもある」という点です。

これまでにながたし作り手として接してきた本は、何十萬部が発行されていようと読むのはひとりだけでした。作り手はそのひとりに対してメッセージが届くように、楽しんでいただけるように苦心します。そうしてきたために、

教科書が教室という現場で、その場のみなが学ぶ手がかりにするための道具であるというあたりまえのことに気づくのに時間がかかりました。

教科書には、道具であるとしてもデザインの間では見飽きない魅力的な美しさやおもしろさが欲しいし、ばらつきのある一人一人の理解度に沿った機能性も備えさせたいと考えると、これまでに作ったことのないような本の姿と、それを作る難しさが見えてきたように思われました。



しんたに まさひろ 1943年、大阪市生まれ。1970年、『アンアン』の創刊に参加して編集デザインの仕事を始める。以降、雑誌だけでなく多数の本のデザインを担当し続けている。

●『小学生の国語』編集委員

中冽正堯 兵庫教育大学名誉教授
あまんきみこ 作家

尾木和英 東京女子体育大学名誉教授
高木展郎 横浜国立大学
三浦和尚 愛媛大学

北川達夫 日本教育大学院大学
平田オリザ 劇作家, 演出家
堀田龍也 玉川大学

赤石元子 東京学芸大学附属幼稚園
足立幸子 新潟大学
安部朋世 千葉大学
阿部藤子 お茶の水女子大学附属小学校
伊坂淳一 千葉大学
井出一雄 玉川大学
今宮信吾 関西大学初等部
岩辺泰史 明治学院大学
後路好章 児童文学研究家
江見みどり 東京都武蔵野市立第四小学校

大杉稔 滋賀県高島市立新旭北小学校
川上郁雄 早稲田大学
河野順子 熊本大学
岸本憲一良 山口大学
吉川芳則 兵庫教育大学
篠田信司 I L E C 言語教育文化研究所
清水健 元東京都中央区立城東小学校
鈴木優子 国語教育研究家
高橋俊三 前群馬大学
田中俊弥 大阪教育大学
田中智生 岡山大学
長崎伸仁 創価大学
夏井いつき 俳人, エッセイスト
堀切和雅 劇作家, エッセイスト
牧戸章 滋賀大学
松友一雄 福井大学
松本仁志 広島大学
三浦修一 横浜国立大学
宮川健郎 武蔵野大学
株式会社三省堂

●『小学生の書写』編集委員

中冽正堯 兵庫教育大学名誉教授

小西憲一 香川大学
小林比出代 長野県立松本深志高等学校
谷口邦彦 安田女子大学
新田直美 安田学園安田小学校
松本仁志 広島大学
三浦和尚 愛媛大学
株式会社三省堂

ことばの学び

平成23年度版
『小学生の国語』『小学生の書写』
教科書特集号Ⅱ

2010年5月30日発行
定価 100円 (本体96円)
編集・発行人 八幡 統厚

●発行所 株式会社 三省堂
〒101-8371 東京都千代田区三崎町2-22-14
TEL 03 (3230) 9427 (編集)
振替 東京 00160-5-54300
三省堂印刷株式会社
〒192-0032 東京都八王子市石川町2951-9



サポート・ネットワーク・プログラム(SNP)



- 学習指導書
- ワークシート集
- 朱書編
- 学習指導事例集
- 伝統的な言語文化の指導
- 図書館・情報の指導
- 音読・朗読CD
- 伝統的な言語文化CD など



学習指導書

辞書

- 漢字学習ノート
- 書写練習帳 など

国語教育
セミナー

児童用
教材



指導用
教材

『ことば
の学び』

わたしたちは、教科書を中心としながら、
さまざまな「学びのサポート・プログラム」を提案します。
『小学生の国語』『小学生の書写』に加えて、
このSNPが教科書の一部として機能します。

- 教科書準拠デジタル教材
- 掛図
- 指導資料DVD など

ウェブサイト
小学生の国語.jp

サポート
書籍



- 『あまのきみセレクション』
- 『授業を豊かにする28の知恵』
- 『書くこと』の学びを支える
- 国語科書写の展開
- 『地域と学校をつなぐ食育』
- 『伝える力』を育てる
- 『生きてはたらくことばの力を育てるカリキュラムの創造』
- 『論理力をはぐくむ国語の授業』
- 『声を届ける』
- 『学校を元気にする50のルール』
- 『論理力をはぐくむ国語の授業』